Family Resilience概念の検討

中平 洋子¹⁾ 野嶋佐由美²⁾

要 旨

本稿の目的は、Family Resilience概念を定義することである。Family Resilience概念を検討するために、CINAHLで「Resilience」「Family」を、医学中央雑誌で「レジリエンス」「家族」をキーワードとして検索し、Resilience及びFamily Resilienceの概念に関する記述のある文献を検討資料とした。

Family Resilience概念の属性として7つが抽出され、Family Resilienceの概念もまたこれら7つによって構成されていた。すなわち、「家族の肯定的な未来志向」「家族の逆境への意味づけと受容」「家族の能力への信頼」「家族の忍耐強い対処」「家族の資源の活用と資源に繋がる力」「家族のゆるぎない拠りどころ」「家族の調整・統制」であった。先行要件は、「逆境」「逆境によって生じる様々なストレス」であった。帰結は、「適応」「成長」「well-being」であった。

以上のことから、Family Resilienceは、「家族が体験する逆境と逆境に伴って生じる様々なストレスに対し、家族が力を発揮し奮闘することを通して、適応、成長、well-beingがもたらされる過程」であり、家族の力は、肯定的な未来志向、逆境への意味づけと受容、自己の能力への信頼、忍耐強い対処、資源の活用と資源に繋がる力、ゆるぎない拠りどころ、調整・統制であると定義した。

キーワード：家族、レジリエンス、家族レジリエンス、看護

1. はじめに

人の力に注目した概念として、ストレンクス (Strength) やエンパワーメント (Empowerment) があるが、近年、レジリエンス (Resilience) も注目されている。Resilienceの研究は、厳しい状況下にあったにも拘わらず、健全に成長した子どもの研究から始まった¹⁾。研究が始まった頃、Resilienceは、個人の生まれ持った特性であると考えられていた。その後、環境との相互作用を含めて考えられるようになったが、家族をResilience源として位置づける研究者はほとんどいなかった。このことについて、Walsh²⁾は、臨床では伝統的に、家族を弱さという視点から捉えていたこと、また、機能不全の家族の中

で、その影響を受けることなく生き抜いた“個人”にResilienceは存在するとみなされていたため、家族Resilienceという視点から論じられることはなかったと述べている。しかし、危機や持続するストレスに打ち碎かれる家族がある一方で、強さと問題解決能力を発揮する家族があることから、WalshはResilienceの考えを家族に応用し、これをきっかけにFamily Resilience研究が始まった。

Family Resilienceの概念の前提では、家族は修復可能であり、困難に直面した時に家族員が共に努力することを通して、家族は成長すると主張している²⁾。家族のこのような力は、厳しい状況にも拘わらず、逆境を通して鍛えられるのである³⁾。家族をFamily Resilience概念で捉えることで、家族の姿に今までと異なる角度から光をあてることとなり、困難に挑戦する家族と共にある看護に新たな視点を提

1) 愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

2) 高知県立大学看護学部

供すると考えられる。

そこで、本稿では、Family Resilience概念を検討し、定義することを目的とした。

II. Family Resilience概念の検討方法

1) データ収集方法

Family Resilience概念を検討し、定義するために、「Resilience」「Family」「レジリエンス」「家族」をキーワードに、CINAHLと医学中央雑誌を用いて検索した。

CINAHL (1986-2011.10) では、「Resilience」で1,633件、「Resilience」「Family」で409件 (1990-2011.10) であった。概念に関する記述のある論文は80件であった。

医学中央雑誌 (1983-2011.10, 会議録除く) では、レジリエンスで144件、「家族」「レジリエンス」で45件であった。

これらの文献の中から、「Resilience」「Family Resilience」に関して定義されている文献や概念に関する記述のある文献を抽出し、二次文献と図書を加えた。Family Resilience概念を検討するために用いた資料は、英文献21件⁴⁾⁻²⁴⁾、和文献20件²⁵⁾⁻⁴⁴⁾、図書2冊⁴⁵⁾⁴⁶⁾であった。

2) 検討方法

Family Resilience概念の定義やFamily Resilience概念を用いた研究の動向を概観した後に、Family Resilience概念を検討した。

検討のプロセスは、まず、Resilience概念を基盤とした研究の成果から、Resilience概念を検討した。Walker&Avant⁴⁷⁾が提唱する方法を参考に、コーディングシートを作成し、文献の内容を精読しながら、概念に関する記述、定義、先行要件 (その概念の発生に先立って生じる出来事や例)、属性 (何度も現れてくるその概念の特徴)、結果/帰結 (概念が発生した結果として生じる出来事) を抽出した。次に、これらがFamily Resilience概念へ応用できるかを検討した。具体的には、家族を対象とした文献を用い

て、定義、概念に関する記述、属性、先行要件、結果/帰結を抽出した結果を、先に行ったResilience概念の検討結果と比較した。活用した文献は、家族をシステムとして捉えた、また捉えようとしたことが明記されている文献、親・夫婦・家族介護者のように二者関係以上の表現が用いられていた研究で、家族を意識していると判断した研究を分析対象に含めた。その後、導き出されたFamily Resilienceの属性が、家族を対象とした国内の研究成果の中に存在するかを確認した。最後に、Family Resilience概念を定義づけた。

III. Family Resilience研究の概観

1. Family Resilience研究の動向

Family Resilienceは、不幸な出来事に出会うことが前提の概念である。そのため、実験的に測定することが困難であり、またResilienceという現象が自然な反応であるために機能している過程そのものに気づくことができない⁴⁸⁾。したがって、多くの研究が後ろ向きデザイン/回顧的デザインで実施されている。Family Resilienceの要素や構造を質的に明らかにしようとする研究やFamily Resilienceを測定しようとする研究が行われている。

DeHaanら⁴⁹⁾は、Family Resilience研究について、次の2点を述べている。1つ目は、多くの研究が家族員個人からデータ収集していることである。個人からデータ収集しているために、家族そのものを評価しているのではなく、個人の認知を評価していることになっている。1人の家族員に他の家族員の関係や家族全体について問うことも可能だが、個人のデータから家族のレベルを推測しているに過ぎず、これらの研究成果も貴重なデータであるが、Family Resilienceを操作する上では限界があること。2つ目は、一時点のみのデータが収集されていることである。Family Resilienceに関する研究は、継続的にデータを収集する長期的なデザインで計画される必要があると述べている。長期的デザインの必要性に

については、Hawley¹³⁾、Patterson¹⁹⁾も同様の提案をしている。

1) Family Resilienceの要素や構造を明らかにしようとする研究

Family Resilienceの要素や構造を明らかにしようとした研究者に、Marshら¹⁷⁾、DeHaanら⁴⁹⁾、Zauszniewskiら²⁴⁾がいる。

Marshら¹⁷⁾は、精神障がい者の家族について、限界や絶望、負担といったことが研究されているが、それだけでは家族の経験をバランスよく捉えていることにならないとして、Family Resilienceの要素を分析した。131人の家族を対象に調査しており、病者の母、父、妻、夫、姉妹、兄弟、娘、息子と、幅広い関係性の家族員を調査対象としていた。家族員は病者と関わることで、成長したと感じており、自分自身、家族、病者のResilienceについての語りから、Resilienceの要素を明らかにした。

DeHaanら⁴⁹⁾は、家族の差異ばかりでなく共通性にも目を向ける必要があるとして、ストレス状況にある家族が、共通して辿る過程を明らかにしている。初めて子どもを持った夫婦46組を対象に行った質問紙調査への回答と議論場面の録画からデータを収集し分析した。その結果、妊娠6-9ヶ月目、出産後6ヶ月、出産後1年の3時点における変化のパターンによって、6グループに分類されることを報告している。

Zauszniewskiら²⁴⁾は、重篤な精神障がい者の家族員のResilience研究をレビューした結果から、家族員のResilienceの指標として、「受容」、「強さ」、「マステリー」、「希望」、「自己効力感」、「首尾一貫性の感覚」、「臨機応変さ」をあげている。家族員のResilienceを高めることは、家族員とケア提供される病者の両方のwell-beingを高めることになると述べている。

2) Family Resilienceを測定しようとする研究

Family Resilienceを測定しようとする研究には、尺度開発の試みや、独自に複数の尺度を組み合わせている研究がある。

得津ら⁴⁴⁾は、家族システムを見る視点として、WalshのFamily Resilience概念の指標を基に家族機能尺度を作成し、尺度開発に向けた予備調査を行っている。その結果、Walshの言う超越性と精神性が日本では適応しにくかったこと、個人のレジリエンスと家族の置かれた社会的状況と家族レジリエンスとの相互影響過程の検討が必要であること、家族のおかれた文脈や家族周期、調査対象者のライフサイクルを考慮することの必要性等が述べられている。Family Resilienceを明らかにする為に、家族で話し合いながらの方法や複数の家族員の記述を比較するという研究方法の工夫を提案している。

Shinら⁵⁰⁾は、家族の強さ、問題解決/対処技術、家族のコミュニケーション、ソーシャルサポート、ストレス状況に対する家族の評価・信念の5つを測定することで、Family Resilienceを測定しようと考え、既存の尺度を組み合わせて用いることでFamily Resilienceを測定している。

以上のように、Family Resilienceをどのようにして捉えればよいのかについて研究者が試行錯誤している段階である。

2. Family Resilienceの定義

Family Resilience概念について、Walsh⁵¹⁾、Hawleyら¹³⁾、Patterson¹⁹⁾、入江⁴³⁾、得津ら⁴⁴⁾が定義を行っている。

Resilience概念を家族に応用したWalsh⁵¹⁾は、Family Resilienceを「逆境に際して家族が機能するという理解を越えたものであり、家族が重大な人生上の挑戦に向き合って、回復、修復、成長する可能性を含んでいる」と定義している。これには、単にストレス状況を調整する、負担を引き受ける、苦しい体験を生き抜くということを超えて、逆境を乗り越えられるような個人や関係性の変化、成長の可能性を含み、家族が奮闘することによって将来出合う挑戦に対しても、対応できるようになることが含まれている。つまり、困難な出来事に遭遇した直後から適応までの長期的な時間経過を視野に入れている。さらに、家族には家族独自の挑戦や抑制の仕方、資源が

あり、家族が感じる困難もそれぞれ違うため、問題の乗り越え方やその有効なプロセスは、家族によって異なるものである。そして、Walshは、自らの臨床実践と研究の結果から、Family Resilienceの重要な過程を家族機能の3側面から明らかにしている。それは、家族信念システム、組織のパターン、コミュニケーションからなり、家族の静的な特性ではなく、Family Resilienceを高めるために、家族が利用し、手に入れることができる強さと臨機応変さを含む動的なプロセスである。

Hawleyら¹³⁾は、Family Resilienceを、「現在そして時の経過の中で、ストレスに直面した時、家族が適応し乗り越えるための家族のやり方」と定義し、Resilientな家族は、発達上のレベル、リスク因子と保護的因子の相互作用的な組合せ、家族の共有された見通しに応じて、積極的に独自のやり方でストレスな状態に対応すると述べている。そして、家族がストレスに対応することで、適応だけでなく、それ以上の成長を遂げることも可能であること、強さや質といった静的な集まりではないこと、時間や成長もFamily Resilienceの一助となるため短期・長期両方の見方が必要であること、さらに成長要因、リスク因子と保護的因子、世界観を含む家族独自の問題の捉え方に影響されることが報告されている。そのため、介入の効果を調べるために尺度などを開発するのではなく、家族ストレスへの適応方法をもっと長期的な視点で分析する必要があると述べている。

Patterson¹⁹⁾は、Family Resilienceを「重大な逆境や危機にさらされた時に、家族が適応し、十分に機能することができる過程」と定義している。これは、家族ストレスコーピング理論を基盤にしており、危機は家族にとってターニングポイントであり、家族の構造や相互作用に大きな影響を与えて家族機能を発達させることにも、低下させることにもなるとしている。重大な逆境というのは、家族の能力(資源、対処行動)以上の要求(ストレッサー、負担、日々の面倒)がもたらされることで、家族の能力と要求のバランスが崩れた時、危機に陥る。そし

て、家族単位と家族員、及び家族とコミュニティの2つのレベルにおいて、能力と要求のバランスが回復する過程が家族の適応だと述べている。

日本国内では、入江⁴³⁾と得津ら⁴⁴⁾が家族をシステムとして捉えてFamily Resilienceを定義している。

入江⁴³⁾は、Family Resilienceの概念分析を行い、その結果、Family Resilienceの属性として、能力(家族がストレスに立ち向かい、回復する能力)と適応(家族がストレスを改善し支配すること)の2つを導き出し、Family Resilienceを「家族がストレスに立ち向かい、そのストレスから立ち直るための家族の能力であり、そのストレスを支配し適応するプロセスである」と定義している。Family Resilienceが発揮されるには、地域のインフォーマル及びフォーマルサポートが大きく関与していること、また、Family Resilienceを測定するには、家族システムの動態を捉えなくてはならず、家族員個々に尺度を用いることに限界があると述べている。

得津ら⁴⁴⁾は、Family Resilienceを「家族が一体となって奮闘する力。家族における適応の過程」と定義している。そして、Family Resilienceの手がかりとして、楽観的協働性(家族が一丸となって前向きに未来を信じて取り組むこと)、共通性(家族がお互いに共通するものを持つこと)、対等性(家族とりわけ夫婦が対等の関係であること)、安定性(社会経済的に安定していること)の4つがあることを述べている。

未だ統一された定義は存在していないが、研究者の多くが、Family Resilienceを家族が逆境の後に、適応に至り成長する過程であると定義している。

IV. Family Resilience概念の検討

1. Family Resilienceの属性

Family Resilience概念の属性を検討する目的で使用できる文献数が少なかったため、まず、Resilience概念を検討した(表1)。その結果、Resilienceの属性として、「肯定的な未来志向」「逆境への意味づ

けと受容」「自己の能力への信頼」「忍耐強い対処」「資源の活用と資源に繋がる力」「ゆるぎない拠りどころ」「調整・統制」の7つが抽出された。その後、これら7つの属性がFamily Resilience概念にも応用できるか、また、これらの属性が、家族を対象とし

た国内の研究成果の中に読みとれるか検討した。その結果、Family Resilience概念も同様に、7つの属性からなるという結論に至った。以下、7つの属性について述べる。

表1. 属性

	研究者・学会 (発行年)	肯定的な 未来志向	逆境への意味 づけと受容	自己の能力 への信頼	忍耐強い 対処	資源の活用と 資源に繋がる力	ゆるぎない 拠りどころ	調整・統制
1	アメリカ心理学会 (APA)			○	○	○	○	○
2	Black, K. et al (2008)	○				○	○	
3	Connor, K.M. et al (2003)	○	○	○		○		
4	Cook, K.V. (2000)			○		○	○	
5	Dyer, J. et al (1996)		○	○	○	○		
6	Earvolino-Ramirez M, (2007)	○		○	○	○	○	○
7	Gartland, D. et al (2011)		○	○			○	
8	Garity, J. (1997)	○			○			
9	Gillespie, B.M. et al (2007)	○		○	○			
10	Hawley, D.R et al (1996)	○			○			
11	Klerk, H.D. et al (2011)		○			○	○	
12	Livingstone, W. et al (2011)	○	○		○			
13	Lundman, B. et al (2010)		○	○	○			
14	Marsh, D.T. et al (1996)	○	○	○	○	○		
15	Masten, A.S. et al (1993)				○			
16	Patterson, J.M. (2002)	○	○	○				
17	Wagnild, G.M. et al (1993)		○	○				
18	Wagnild, G.M. et al (1990)		○	○	○		○	
19	Walsh, F.F. (2003)	○	○			○	○	
20	Zauszniewski, J.A. et al (2009)		○	○	○	○		
21	Zauszniewski, J.A. et al (2010)	○	○	○	○	○		
22	石毛みどり他 (2005a)	○	○			○		
23	石毛みどり他 (2005b)	○			○	○		
24	井隼経子他 (2008)	○		○	○	○	○	
25	石井京子他 (2006)	○	○		○	○	○	○
26	長田春香他 (2006)	○		○		○	○	○
27	小花和 Wright 尚子 (2002)			○	○	○	○	○
28	小塩真司他 (2002)	○			○			○
29	佐藤琢志 (2009)			○		○		
30	仁尾かおり他 (2006)	○	○		○	○	○	
31	砂賀道子他 (2011)	○	○		○		○	○
32	谷口清弥他 (2010)	○			○			○
33	富川順子 (2008)	○		○	○	○	○	
34	中村有吾他 (2009)	○			○	○		○
35	長尾史英他 (2008)	○				○		○
36	橋本真規他 (2011)				○	○		
37	原 郁水他 (2010)	○			○			○
38	平野真理 (2010)	○			○	○		○
39	三吉和子 (2004)	○	○	○	○	○		
40	入江安子 (2003)				○			
41	得津慎子他 (2006)	○	○	○	○		○	○
42	Wolin, S.J. (2002)		○		○	○		○
43	Grotberg, E.H (2003)	○	○	○	○	○	○	○

1) 肯定的な未来志向

「肯定的な未来志向」とは、厳しい状況の中にあっても、物事の明るい方を見ることによって、悲観しすぎず、楽観的すぎず、現実的な希望を持って未来を志向することである。

この属性を抽出していたものに、砂賀ら³⁴⁾、Gillespieら¹²⁾、小塩ら³¹⁾、平野⁴¹⁾、石毛ら²⁶⁾がおり、中でも重要な要素として、“希望・目標”“未来志向”“楽観性”がある。“希望・目標”は、これから先の希望・目標を持っていること、“未来志向”は、過去を振り返って悲観するのではなく、未来を志向すること、“楽観性”は、物事の明るい方を見ようとするものである。

砂賀ら³⁴⁾は、がん体験者のResilienceの概念分析の結果、対処戦略を属性の1つとして導き出し、その中に将来への希望を持つことを含めている。Gillespieら¹²⁾は、概念分析により、希望をResilienceの属性として導き出している。希望は、将来の目標と関係があり、目標は成し遂げられる、また目標への道は創られ進んでいけるという信念によって定義できると述べている。小塩ら³¹⁾は、不安で脅威をもたらす状況にあっても、先を見通し、前向きな展望を持ち続ける肯定的な未来志向を、Resilienceを導く重要な要素として精神的回復尺度の項目にしている。平野⁴¹⁾や石毛ら²⁶⁾は、レジリエンス尺度に、楽観性を含めている。

家族の研究において、鈴木⁵²⁾は、精神分裂病者の家族が、世話をする長い経過の中で、家族の経験変化に伴い希望の内容を変化させながらも、何らかの希望を持ち続けていることを明らかにし、家族が希望を持つことのできる能力を獲得していったこと、希望が家族を支え、家族の可能性を広げ、力量を高めると考察している。宮崎ら⁵³⁾は、精神障がい者の男性家族員が、将来を悲観するのではなく、明日に向けて希望を持つなど前向きに考えていることを、川添⁵⁴⁾は、統合失調症患者を持つ母親の将来の希望を信じる気持が支援を続けるための動機づけとなっていたことを報告している。

これらのことから、「家族の肯定的な未来志向」とは、「家族が、厳しい状況の中にあっても、物事の明るい方を見ることによって、悲観しすぎず、楽観的すぎず、現実的な希望を持って未来を志向すること」と定義できる。

2) 逆境への意味づけと受容

「逆境への意味づけと受容」とは、厳しい状況を意味あることと洞察して、逆境の中に意味を見出し、変えられないことに対しては、無力感や無能感を持たず、ある種の諦めを持って受け入れることである。

この属性を抽出していたものに、砂賀ら³⁴⁾、仁尾ら³³⁾、Connorら⁶⁾、Wagnildら²⁰⁾²¹⁾などがおり、中でも重要な要素として、“意味づける”と“受容”がある。“意味づける”は、厳しい状況を意味あることと洞察して、その中に意味を見出すこと、“受容”は、甘受することである。

砂賀ら³⁴⁾は、意味づけることが肯定的変容を促進すると述べている。Wagnildら²⁰⁾は、喪失の後に適応に至った80歳以上の女性を対象とした研究から、運命の甘受/諦めが、Resilienceの要素の1つになることを明らかにしている。Wagnildらが後に開発したResilience尺度²¹⁾においても、尺度項目に「自己の人生の受容」を含めている。同様にConnorら⁶⁾も、物事は意味があって生じる、生じたことは運命であり神が助けると考える精神性を尺度項目に含めている。仁尾ら³³⁾は、病気を持つ自分を受け入れようとし、病気のおかげでいい体験ができたと思うことを内的な強さとして位置づけている。

家族の研究において、岩崎⁵⁵⁾は、精神病者の家族が病者のケア継続のために、物事を肯定的に解釈してケアを行っていることを、永井⁵⁶⁾は、在宅認知症高齢者の介護者が、ストレスに対して事態を吟味し、介護に意味を見出し受容するという解釈統制型の対処をしていることを明らかにしている。

これらのことから、「家族の逆境への意味づけと受容」とは、「家族が、厳しい状況を意味あることと洞察して、逆境の中に意味を見出し、変えられないことに対しては、無力感や無能感を持たず、ある

種の諦めを持って受け入れること」と定義でき、この過程では、家族内で率直な意見が出されオープンな交流が行われると考える。

3) 自己の能力への信頼

「自己の能力への信頼」とは、過去の成功体験や現在対処できていることに基づいた自身の能力への信頼である。

この属性を抽出していたものに、Wagnildら²⁰⁾、佐藤³²⁾、Gillespieら¹²⁾がいる。中でも重要な要素として、“自己信頼”がある。

Wagnildら²⁰⁾は、喪失の後に適応に至った80歳以上の女性を対象とした研究から、自己信頼がResilienceの要素の1つになることを明らかにしている。この自己信頼には、自身の能力への信頼、そして自分の強さと限界を認識する能力が含まれている。Wagnildらが後に開発した尺度²¹⁾においても、2要因のうちの1つ“個人の能力”の中に、自己効力を含めている。アメリカ心理学会⁴⁾では、自分自身へのポジティブな見方と自分の強さ・能力への信頼が、逆境においてうまく適応していくプロセスに必要なだと述べている。Gillespie¹²⁾は、概念分析で自己効力感を導き出し、それは逆境に直面した時にどれくらい努力するか、どれくらい長くやり通すかを決心することに影響すると述べている。佐藤³²⁾は、自己効力感を目の前の課題をやり通す自信に繋がる能力とし、今までにどの程度身につけているかによって個々に異なり、不遇な境遇に出合った時に重要な働きをすると述べている。

家族の研究において鈴木⁵²⁾は、精神分裂病患者の家族は、家族自身への信頼が希望を支える要因になっていることを報告しており、また、池添ら⁵⁷⁾は、脳血管障害や認知症高齢者などの病者を内包する家族において、介護キャリア形成が困難な家族には自信の剥奪が生じていることを明らかにしている。

これらのことから、「家族の能力への信頼」とは、厳しい状況において新たな挑戦に向かう際に欠かせないものであり、「家族の過去の成功体験や現在対処できていることに基づく、家族の能力への信頼

と定義できる。

4) 忍耐強い対処

「忍耐強い対処」とは、対処スキルを獲得・強化し、その能力を用いて状況に立ち向かい続けることである。

この属性を抽出していたものに、Gillespie¹²⁾、Wolin⁴⁵⁾、小花和³⁰⁾、砂賀³⁴⁾、Wagnild²¹⁾らがいる。中でも重要な要素として、“対処すること”と“諦めないこと”がある。“対処すること”は、対処スキルを獲得・強化して状況に立ち向かうこと、“諦めないこと”は、困難な状況にあっても諦めずにやり続けることである。

Gillespie¹²⁾は概念分析の結果、対処をResilienceの属性の1つとして導き出している。どのように対処するかがResilienceに最も重要なことで、効果的な対処は、心理社会的な危険因子を緩和するものであること、そしてうまく対処できた人々の多くは、問題解決型の対処を用いていたことを報告している。Wolinら⁴⁵⁾が25人のResilientなサバイバーと面接して抽出した7つの要素の中に「イニシアティブ(initiative)」が含まれている。これは、困難な状況の中で様々な対処法を模索したのちに、努力を一点に集中させて取り組み、何かを生み出すことであると説明されている。また砂賀ら³⁴⁾は、がん体験者のResilienceの属性である対処戦略に、コーピングスキルの獲得をあげている。小花和³⁰⁾、Wagnildら²¹⁾などは、諦めないことについて述べており、自分の人生を再建する努力を続けて逆境の中で諦めないことを、「根気強さ」、「忍耐」という言葉で表現している。

家族の研究において中坪⁵⁸⁾は、統合失調症患者の家族は、期待と不安の間を揺れ動いており、その期待を実現するために病気への対処を行っていると述べている。また、厳しい状況に向き合っている家族が、必死に対処行動をとり⁵⁹⁾、がむしゃらに対処したプロセスの後に、家族が成長している様子が報告されている⁶⁰⁾。

これらのことから、「家族の忍耐強い対処」とは、

「家族が、対処スキルを獲得・強化し、その能力を用いて、結束して状況に立ち向かい続けること」と定義できる。

5) 資源の活用と資源に繋がる力

「資源の活用と資源に繋がる力」は、持っている資源を活用することと、社会性を発揮して能動的に資源と繋がることである。

この属性を抽出していたものに、佐藤³²⁾、富川³⁶⁾、Earvolino-Ramirez⁹⁾、石井ら²⁸⁾、平野⁴¹⁾らがいる。中でも重要な要素として、“資源”と“繋がる力”がある。“資源”は、資源が存在し活用すること、“繋がる力”は、自ら社会性を発揮して能動的に資源と繋がる力である。

佐藤³²⁾は、どれだけソーシャルサポートを持っているのか、どれだけ他者と協調していく社会性があるのかをResilienceの尺度項目にしている。富川³⁶⁾は、統合失調症を持つ人のResilienceの概念を検討した結果、世界と繋がる力、人と繋がる力を、Resilienceの過程を促進する力として導き出している。また、概念分析を行ったEarvolino-Ramirez⁹⁾は、肯定的な関係性／ソーシャルサポートをResilienceの属性の1つにあげており、肯定的な関係がコミュニケーションや支援の機会をもたらすと説明している。石井ら²⁸⁾は、高齢者の介護を行う家族のResilience研究において、家族は社会資源を持ち (I Have)、社会資源を活用 (I Can) していることを報告している。平野⁴¹⁾は、他者と関わることを好み、コミュニケーションが容易に図れる傾向を社交性と定義して、Resilience要因尺度の項目にしている。

家族の研究において、渡辺ら⁶¹⁾は、終末期にある病者とその家族は、家族構造と家族システムの変化に直面し、看取りに関わるソーシャルサポートを獲得して適応に向かうことを報告している。さらに家族は、人的資源を導入するだけでなく、家族外部の物理的条件も整えていた。これらのことから、「家族の資源の活用と資源に繋がる力」とは「家族が持っている資源を活用することと、家族が社会性を発揮して能動的にそれらの資源と繋がること」と定義で

きる。

6) ゆるぎない拠りどころ

「ゆるぎない拠りどころ」とは、安心や安全、安らぎがもたらされる確固とした拠りどころを持っていることである。この拠りどころは、人であったり、場であったり、神であったりする。孤独ではないことである。

この属性を抽出していたものに、小花和³⁰⁾、長田ら²⁹⁾などがある。中でも重要な要素として、“情緒的サポートの認識”がある。情緒的サポートについて、アメリカ心理学会⁴⁾は、逆境に適応していくプロセスには、家族内外のケアリングまたは支持的な関係(いたわりあい、支え合う関係)が最も重要だと位置づけている。小花和³⁰⁾と長田ら²⁹⁾は、小児を対象とした研究の結果、小児期のResilienceを構成する要因として、親や家族、友人や教員による見守りや支え、そして安らげる家庭をあげている。これらから、何らかの拠りどころがあり、そこから情緒的サポートを受けられること、言いかえるならば、孤独ではないことがいえる。

家族の研究においては、病者の存在や病者との絆が、家族員の拠りどころになっていることも多く、久松ら⁶²⁾は終末期がん患者の家族にとって、患者との絆が不安への対処の支えになっていることを報告している。また、納富ら⁵⁹⁾は、小児がん患児の父親は、子どもを亡くす恐怖から何とかもちこたえ、人間的成長を実感する全プロセスに、頑張る病児からのエールや病児のきょうだいの存在、同僚からの理解・励ましが影響を与えていたことを明らかにしている。また、自助グループのような、経験を同じくする人々の集まりの場も、家族にとっての拠りどころとなっていた⁶³⁾⁶⁴⁾。

これらのことから、「家族のゆるぎない拠りどころ」とは、「家族に、安心や安全、安らぎをもたらし確固とした拠りどころ」と定義できる。

7) 調整・統制

「調整・統制」とは、自己の感情や衝動を調整・統制すること、複雑な状況に巻き込まれず、状況と

自分との間に適度な距離を確認できることである。

この属性を抽出していたものに、小塩ら³¹⁾、平野⁴¹⁾、砂賀ら³⁴⁾などがある。中でも大切な要素は、“情動のコントロール”である。

アメリカ心理学会⁴⁾は、強い感情や衝動を制御する能力が、逆境からの適応を促進すると述べている。小塩ら³¹⁾は、精神的回復力尺度の項目に、感情調整を含めている。それは、ネガティブな出来事に遭遇し、たとえ混乱した感情が生じたとしても、それをうまく調整することで、新たな別の活動を開始することに繋がるため、Resilienceを導く内的特性として位置づけている。また、平野⁴¹⁾は、体調や感情などの条件に左右されコントロールしにくい部分を統御する力を統御力としてResilience要因尺度の項目に含め、砂賀ら³⁴⁾も情動コントロールをがん体験者のResilienceの属性としている。

家族の研究において金子ら⁶⁵⁾は、筋委縮性側索硬化症病者の家族が、介護生活の中でどのように家族コントロールを行っているかを明らかにしている。家族は、不確かな状況の中で、情緒的な揺らぎを経験しながらも、病という外的なものにコントロールの主体を渡すのではなく、家族自らの手にコントロールをつなぎとめ家族生活を維持していたと述べている。また、久松ら⁶²⁾は、末期がん患者の家族が、余命についての説明直後に、受け入れられない気持ちを安定させる努力をしていることを報告している。

これらのことから、「家族の調整・統制」とは、「家族が、感情や衝動を調整・統制すること、複雑な状況に巻き込まれず、状況と家族との間に適度な距離を確認できること」と定義できる。この過程においては、家族内で率直な意見を出し合いオープンな交流が行われると考える。

2. Family Resilienceの先行要件

Resilience概念は、逆境／厳しい状況を経験した後に、うまく適応できる人がいる一方でそうでない人が居ることの発見から導き出された概念である。従って、Resilience, Family Resilienceの先行要件として、厳しい状況下に置かれることが欠かせない。

小児の発達領域でResilience研究が始まった頃には、人生上の予測不可能で自らの力が及ばないような出来事を逆境と位置づけ、そのような出来事を体験した人々を対象に研究が進められていたが、次第に逆境と捉える範囲が変化し、日常のストレス場面までも逆境に含めるようになっていく。

これまでに行われている概念分析では、Resilienceの先行要件として、「逆境」⁸⁾⁹⁾¹²⁾「外傷の解釈」¹²⁾「認識能力」¹²⁾「現実的世界観」¹²⁾が、また対象者を絞ったResilience概念分析の結果として、「統合失調症の発症」³⁶⁾「がんに関連したストレス」³⁴⁾「内なる強さ」³⁴⁾「個人を取り巻く環境」³⁴⁾が報告されている。Family Resilienceの先行要件として、「ストレス」⁴³⁾が報告されている。その他に検討した文献からは、先行要件として、病気の発症や障がいを抱えること¹¹⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁷⁾²³⁾²⁴⁾²⁸⁾³³⁾³⁶⁾³⁹⁾、それに伴って生じるストレス²⁴⁾³³⁾³⁴⁾³⁶⁾、日常のストレス場面（受験、友人関係、老いることなど）⁴⁾⁷⁾²⁰⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁹⁾³¹⁾³²⁾³⁷⁾が読みとれた。

概念分析を行った研究者の中には、厳しい状況下に置かれること以外に、逆境の捉え方や世界観¹²⁾、内なる力³⁴⁾、ソーシャルサポートを含む環境³⁴⁾を先行要件に位置づける者も存在した。しかし、別の研究者⁴³⁾は、ソーシャルサポートは、Family Resilienceの影響要因だと考えていた。このように、先行要件の考え方には、いくぶん違いが見られたが、多くの研究は、逆境やストレスを先行要件に位置付けて研究を行っていた。

以上の事から、Family Resilienceの先行要件を、「逆境」「逆境によって生じる様々なストレス」とした。

3. Family Resilienceの結果／帰結

Resilience概念は、逆境／厳しい状況を経験した後に、うまく適応できる人がいる一方でそうでない人が居ることの発見から導き出された概念である。従って、Resilience, Family Resilienceの結果／帰結として、厳しい状況からの立ち直りが欠かせない。

しかし、立ち直りの程度について言及されている文献は少なかった。統合失調症を持つ人のResilience

を検討した富川³⁶⁾は、疾患や症状による影響が改善していること、回復過程にみられる重要な指標が観察されることと述べている。

これまでに行われている概念分析では、Resilienceの結果／帰結として、「統合」¹²⁾「制御」¹²⁾「適応」¹²⁾「成長」¹²⁾「効果的な対処」⁹⁾「マステリー」⁹⁾「肯定的適応」⁹⁾「効果的な対処」⁸⁾が、また対象者を統合失調症を持つ人やがん患者に絞ったResilience概念分析の結果として、「回復と新たな適応」³⁶⁾「肯定的な適応」³⁴⁾「well-beingの獲得」³⁴⁾「QOLの向上」³⁴⁾「エンパワーメントを高める」³⁴⁾が報告されている。Family Resilienceの結果／帰結としては、「成功感」⁴³⁾「満足感」⁴³⁾が報告されている。その他に検討した文献からは、ダメージが和らぐこと²⁷⁾³¹⁾³⁶⁾や介護が継続出来ていること¹⁴⁾²⁸⁾³⁹⁾、well-beingがもたらされること⁵⁾⁶⁾¹⁶⁾²¹⁾²⁴⁾³⁴⁾³⁷⁾が読みとれた。

回復指標が観察されることや何かが出来るようになるといった客観的な指標だけではなく、「成功感」「満足感」「well-beingの獲得」「QOLの向上」のように、逆境を乗り越えたことに対する個人や家族の主観も結果／帰結に含まれていた。

以上の事から、Family Resilienceの結果／帰結を、「適応」「成長」「well-being」とした。

V. 結論

Family Resilienceは、「家族が体験する逆境や逆境に伴って生じる様々なストレスに対して、家族が力を発揮し奮闘することを通して、適応、成長、well-beingがもたらされる過程」であり、家族の力は、肯定的な未来志向、逆境への意味づけと受容、自己の能力への信頼、忍耐強い対処、資源の活用と資源に繋がる力、ゆるぎない拠りどころ、調整・統制の7つから構成されていた。

どの家族にもFamily Resilienceが存在し、厳しい状況の中で奮闘することを通して発揮されうるものであることは、家族にとって、また支援する立場にある専門職にとって希望の持てることである。しか

し、その一方で、木下⁶⁶⁾が指摘するように、「全て本人次第」、家族に置き換えるならば「全て家族次第」と、困難から立ち直れないのは家族のせいだという結論に帰着しないよう注意しなければならない。

今後は、日本国内においても家族を対象とした質的研究を行い、Family Resilienceの属性を確認するとともに、これらの属性がどのように獲得されるのか、またどのように発揮されるのか、長期的な視点を持って明らかにする必要がある。

〔受付 '12.08.05〕
〔採用 '13.02.05〕

引用文献

- 1) Werner, E.E. : HIGHT-RISK CHILDREN IN YOUNG ADULTHOOD : A Longitudinal Study from Brith to 32 Years, American Journal of Orthopsychiatry, 59(1) : 72-81, 1989
- 2) Walsh, F. : The concept of family resilience : crisis and challenge, Family Process, 35 (3) : 261-81, 1996
- 3) Wslsh, F. : Normal Family Processes : Family Resilience : Strengths Forged through Adnersity, 399-427, THE GUILFORD PRESS, NY, 2012
- 4) American Psychological Association (APA) ホームページ : The Road To Resilience, <http://www.apa.org/helpcenter/road-resilience.aspx> (2012.01.26)
- 5) Black, K., Lobo, M.A. : A Conceptual review of family resilience factors, Journal Of Family Nursing, 14(1) : 33-55, 2008
- 6) Connor, K.M., Davidson, J.R. : Development of a new resilience scale : the Connor-Davidson Resilience Scale (CD-RISC), Depression And Anxiety, 18(2) : 76-82, 2003
- 7) Cook, K.V. : 'you have to have somebody watching over your back, and if that's god, then that's mighty big': the church's role in the resilience of inner-city youth., Adolescence, 35(140) : 717-30, 2000
- 8) Dyer, J., McGuiness, T. : Resilience : Analysis of the concept, Archives of Psychiatric Nursing, 10(5) : 276-282, 1996
- 9) Earvolino-Ramirez : Resilience : a concept analysis, Nursing Forum, 42(2) : 73-82, 2007
- 10) Gartland, D., Bond, L., Olsson, C.A., et al : Development of a multi-dimensional measure of resilience in adolescents: the Adolescent Resilience Questionnaire, BMC Medical Research Methodology, 11 : 134, 2011
- 11) Garity, J. : Stress, learning style, resilience factors, and ways of coping in Alzheimer family caregivers : American Journal of Alzheimer's Disease, 12(4) : 171-8, 1997

- 12) Gillespie, B.M., Chaboyer, W., Wallis, M. : Development of a theoretically derived model of resilience through concept analysis, *Contemporary Nurse*, 25(1-2) : 124-135, 2007
- 13) Hawley, D.R., De Haan, L. : Toward a Definition of Family Resilience: Integrating and Family Perspectives, *Family Process*, 35(3) : 283-298, 1996
- 14) Klerk, H.D., Greeff, A.P. : Resilience in Parents of Young Adults with Visual Impairments, *Journal of Visual Impairment & Blindness*, 105(7) : 414-24, 2011
- 15) Livingstone, W., Mortel, T.F., Taylor, B. : A path of perpetual resilience: Exploring the experience of a diabetes-related amputation through grounded theory, *A Journal for the Australian Nursing Profession*, 39(1) : 20-30, 2011
- 16) Lundman, B., Alex, L., Jonsen, E., et al : Inner strength—a theoretical analysis of salutogenic concepts, *International Journal of Nursing Studies*, 47(2) : 251-60, 2010
- 17) Marsh, D.T., Lefley, H.P., Evans-Rhodes, D. et al : The family experience of mental illness: evidence for resilience, *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 20(2) : 3-12, 1996
- 18) Masten, A.S., Best, K.M., Garmezy, N. : Resilience and Development: Contributions from the study of children who overcome adversity, *Development and Psychopathology*, 2 : 425-444, 1993
- 19) Patterson, J.M. : Understanding Family Resilience, *Journal of Clinical Psychology*, 58(3) : 233-346, 2002
- 20) Wagnild, G.M., Young, H.M. : Resilience among older women, *Image-The Journal Of Nursing Scholarship*, 22(4) : 252-255, 1990
- 21) Wagnild, G.M., Young, H.M. : Development and psychometric evaluation of the Resilience Scale, *Journal of Nursing Measurement*, 1(2) : 165-178, 1993
- 22) Walsh, F.F. : Family Resilience: A Framework for Clinical Practice, *Family Process*, 42(1) : 1-18, 2003
- 23) Zauszniewski, J.A., Bekhet, A.K., Suresky, M.J. : Effects on resilience of women family caregivers of adults with serious mental illness: the role of positive cognitions, *Archives of Psychiatric Nursing*, 23(6) : 412-22, 2009
- 24) Zauszniewski, J.A., Bekhet, A.K., Suresky, M.J. : Resilience in Family Members of Persons with Serious Mental illness. *The Nursing Clinics of North America*, 45(4) : 613-26, 2010
- 25) 石毛みどり, 無藤隆 : 中学生におけるレジリエンス(精神的回復力) 尺度の作成, *カウンセリング研究*, 38(3) : 235-246, 2005
- 26) 石毛みどり, 無藤隆 : 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連—受験期の学業場面に着目して—, *教育心理学研究*, 53 : 356-367, 2005
- 27) 井俣経子, 中村知靖 : 資源の認知と活用を考慮したResilienceの4側面を測定する4つの尺度, *パーソナリティ研究* 17(1) : 39-49, 2008
- 28) 石井京子, 近森栄子 : 高齢者の介護を行う家族のレジリエンスの構造要素分析, *ヒューマン・ケア研究*, 7 : 64-72, 2006
- 29) 長田春香, 岩本文月, 大秦加奈子, 他 : 中学生の日常的ストレスにおけるレジリエンスの意義, *小児保健研究*, 65(2) : 246-254, 2006
- 30) 小花和 Wright尚子 : 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス, *日本生理人類学会誌*, 7(1) : 25-32, 2002
- 31) 小塩真司, 中谷素之, 金子一史, 他 : ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—, *カウンセリング研究*, 35(1) : 57-65, 2002
- 32) 佐藤琢志 : レジリエンス尺度の標準化の試み—「S-H式レジリエンス検査(パート1)」の作成および信頼性・妥当性の検討, *看護研究*, 42(1) : 45-52, 2009
- 33) 仁尾かおり, 藤原千恵子 : 先天性心疾患を持つ思春期になる人のレジリエンスの特徴, *日本小児看護学会誌*, 15(2) : 2-29, 2006
- 34) 砂賀道子, 二渡玉江 : がん体験者のレジリエンス, *The Kitakanto Medical Journal*, 61(2) : 135-143, 2011
- 35) 谷口清弥, 宗像恒次 : 看護師のレジリエンスにおける心理行動特性の影響—共分散構造分析による因果モデルの構築, *メンタルヘルスの社会学*, 16 : 62-70, 2010
- 36) 富川順子 : 統合失調を持つ人のresilience, *高知女子大学紀要, 看護学部編*, 58 : 53-71, 2008
- 37) 中村有吾, 梅林厚子, 滝野揚三 : 発達段階別にみた本邦におけるレジリエンス研究の動向—幼児期から青年期まで—*学校危機とメンタルケア*, 2 : 35-46, 2009
- 38) 長尾史英, 芝崎美和, 山崎晃 : 幼児用レジリエンス尺度の作成, *幼年教育研究年報: The Annual of research on early childhood* (30) : 33-39, 2008
- 39) 橋本真規, 橋本陽介, 熊井正之 : 障害児を育てる母親のレジリエンスの実態—半構造化面接調査による質的研究, *教育情報学研究*, 10 : 1-13, 2011
- 40) 原郁水, 水野由佳里, 村田育世, 他 : ブラジル人児童と日本人児童のレジリエンス(精神的回復力)の比較, *IRIS HEALTH: 愛知教育大学保健環境センター紀要*, 9 : 7-15, 2010
- 41) 平野真理 : レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成—*パーソナリティ研究*, 19(2) : 94-106, 2010
- 42) 三好和子 : 家族をリソースとするレジリエンス尺度作成の試み, *日本サイコセラピー学会誌*, 5(1) : 45-50, 2004
- 43) 入江安子 : ファミリーレジリエンスの概念分析, *四天王寺国際仏教大学紀要*, 35, *短期大学部第3号* : 95-105, 2003
- 44) 得津慎子, 日下業穂子 : 家族レジリエンス尺度(FRI)作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための検討, *家族心理学研究*, 20(2) : 99-108, 2006
- 45) Wolin, S.J., Wolin, S. : THE RESILIENT SELF, 1993., 奥野光,

- 小森康訳：サバイバーと心の回復力—逆境を乗り越えるための七つのレジリエンス, 162-192, 金剛出版, 東京, 2002
- 46) Grotberg, E. : HResilience for Today, Praeger Publishers, 2003
- 47) Walker, L.O., Avant, K.C. : Strategies for Theory Construction in Nursing, 4th Edition, 2005, 中木高夫, 川崎修一訳：看護における理論構築の方法, 医学書院, 東京, 2008
- 48) 祐宗省三：ウェルビーイングの発達学, 16-21, 北大路出版, 東京, 2003
- 49) DeHaan, L.G., Hawley, D.R., Deal, J.E. : Operationalising family resilience : A methodological strategy, The American Journal of Family Therapy, 30 : 275-291, 2002
- 50) Shin, S.H., Choi, H. Kim, M.J., et al : Comparing adolescents' adjustment and family resilience in divorced families depending on the types of primary caregiver, Journal of Clinical Nursing, 19(11-12) : 1695-706, 2010
- 51) Wslsh : Normal Family Processes : Family Resilience : Strengths Forged through Adnersity, 399-427, THE GUILFORD PRESS, NY, 2012
- 52) 鈴木啓子：精神分裂病患者の家族の抱く希望の内容とその変化の過程, 千葉看護学会誌, 6(2) : 9-16, 2000
- 53) 宮崎澄子, 岩崎弥生, 石川かおり, 他：精神障害者を家族に持つ男性家族員のケア内容及びケア提供に伴う情緒的体験と対処, 千葉大学看護学紀要, 23 : 7-14, 2001
- 54) 川添郁夫：統合失調症の子供を持つ母親が体験する自己成長過程, 日本精神保健看護学会誌, 16(1) : 23-31, 2007
- 55) 岩崎弥生：精神病患者の情動的負担と対処方法, 千葉大学看護学部紀 20 : 29-40, 1998
- 56) 永井真由美：在宅認知症高齢者の介護者におけるストレス対処様式の構造, 看護学研究, 16(3) : 178-184, 2011
- 57) 池添志乃, 野嶋佐由美：生活の再構築に取り組む家族の介護キャリアの形成困難における悪循環, 家族看護学研究, 14(3) : 20-29, 2009
- 58) 中坪太一郎：統合失調症患者の家族の心理的プロセス—「期待」と「不安」を繰り返す構造に着目して, 家族心理学研究, 24(1) : 1-15, 2010
- 59) 納富史恵, 兒玉尚子, 藤丸千尋：小児がん患児の父親が困難な状況を受けとめていくプロセス, 日本小児看護学会誌, 20(3) : 59-66, 2011
- 60) 藤野成美, 岡村仁：精神障害者の家族介護者における介護の肯定的認識をその関連要因, 臨床精神医学, 36(6) : 781-788, 2007
- 61) 渡辺裕子, 鈴木和子, 佐藤禮子, 他：終末期にある家族成員を含む家族の変化と家族対処, 千葉大学看護学部紀要, 17 : 21-30, 1995
- 62) 久松美佐子, 丹羽さよ子：末期がん患者の家族の不安への対処を支える要因, 日本看護科学学会誌, 31(1) : 58-67, 2011
- 63) 松本啓子, 池田敏子, 羽井佐米子, 他：在宅認知症高齢者の家族介護者が家族no集いに参加することの意味, Journal of Nursing Investigation, 9(2) : 9-14, 2011
- 64) 大久保明子：子どもを亡くした母親にとってのSHGという「場」の意味, 家族看護学研究, 15(3) : 40-46, 2010
- 65) 金子智美, 野嶋佐由美, 長戸和子：筋委縮性側索硬化症 (ALS) 病者の主介護者による家族コントロールのプロセス, 家族看護学研究, 14(3) : 11-19, 2009
- 66) 木下美也子：脆弱性とレジリエンス, こころの科学, 165 : 16-221, 2012

A Review of the Concept of "Family Resilience"

Yoko Nakahira¹⁾ Sayumi Nojima²⁾

1)Ehime Prefectural University of Health Sciences

2)University of Kochi

Key words: Family, Resilience, Family Resilience, Nursing

The purpose of this paper is to define the concept of "Family Resilience".

In order to grasp the general idea of "Family Resilience", literature within CINAHL and Ichusi-Web was searched by keywords such as "Resilience", "Family" or "Family Resilience", and then, these research materials were closely examined. As a result, seven attributes were abstracted from the concept of "Resilience", which were identified as the ones which belonged to "Family Resilience". They were as follows: "the family's future-oriented intention", "the family's recognition and positive acceptance of adversity", "the family's confidence in their own ability", "the family's continuous efforts to cope with difficulties", "the family's utilization of resources and the ability to utilize them", "what the family can mentally count on" and "the family's ability to control emotional state". Antecedents were "adversity" and "various stress associated with the adversity". Consequences were "adaptation" "growth" and "well-being".

Based on the foregoing, the concept of "Family Resilience" was defined as "the process toward adaptation, growth and well-being of the family attained through the family's struggling against the adversity and various stress associated with the adversity with their own seven attributes mentioned above."